筑波大学附属

# 平成二十四年度　国　語　問題用紙

## 注　意

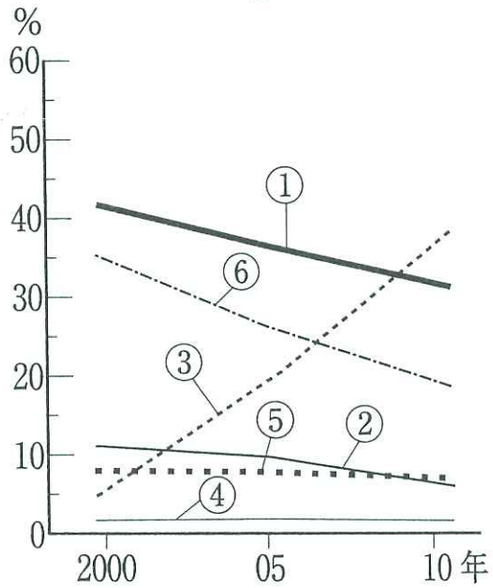
(1) 放送による指示があるまでは、問題用紙に手をつけてはいけません。
(2) 「やめ」といわれたら、すぐにやめなさい。
(3) えんぴつまたはシャープペンシル、消しゴムだけを机の上に出しなさい。
(4) えんぴつや消しゴムなどを貸したり借りたりしてはいけません。
(5) 何か質問があるときや物を落としたときは、声を出さずに静かに手をあげなさい。
(6) 解答用紙は、机の中央に置いて書きなさい。
(7) 問題は【一】から【三】まで、14ページあります。

## 答えを書くときの注意

(1) 答えは、解答用紙の示されたところに、はっきりと書きなさい。わくからはみだしたり、読みにくい字を書いたりしてはいけません。
(2) 答えは、とくに示されているほかは、問題の後にあげてある中から一つだけ選んで、ア、イ、ウ……などの記号で書きなさい。

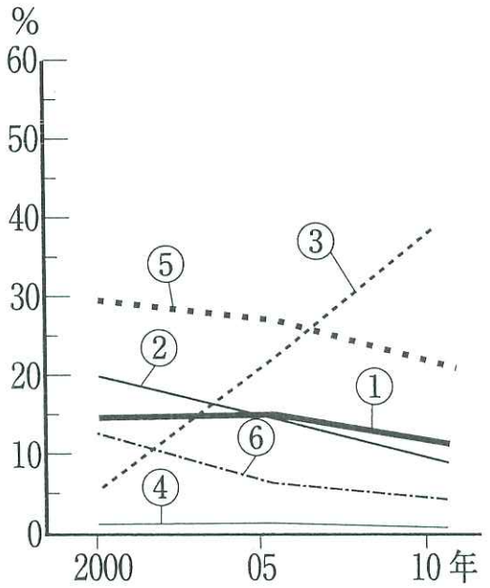
【一】 放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

C



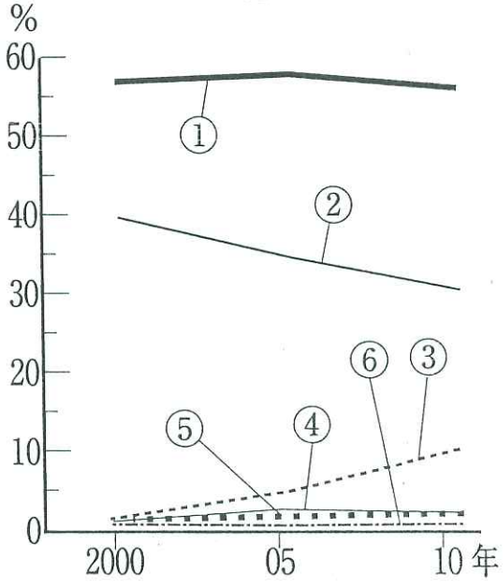

趣味(しゅみ)や娯楽(ごらく)に関する情報を得るのに最も利用するメディア

B




仕事や研究に役立つ情報を得るメディア

A




世の中のできごとや動きについて信頼(しんらい)できる情報を得るメディア

テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・書籍(しょせき)・インターネット

(1)（問題は放送で指示します）

(2)（問題は放送で指示します）

ア　テレビは、仕事や研究に関しても趣味や娯楽に関しても、情報を得るメディアとして選択（せんたく）される比率がほとんど変化がないが、仕事や研究に関しては、10ポイント近く下がってきている。

イ　書籍は、趣味や娯楽に関して選択される比率にほとんど変化がないが、仕事や研究に関しては、10ポイント近く低下しているのに対し、趣味や娯楽に関しては、10ポイント程度の低下にとどまっている。

ウ　ラジオは、選択される比率がきわめて低いが、仕事や研究、趣味や娯楽の両方の分野において、一定の比率を保ち続けている。

エ　雑誌は、仕事や研究に関しては、20ポイント近く低下しているのに対し、趣味や娯楽に関しては、10ポイント程度の低下にとどまっている。

メモ

## 【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の「北斗」は、中学校への進学をひかえた春休みに自転車で東京から大阪まで行く「冒険」の計画を立てる。初めに「父さん」に相談した結果、「母さん」をふくめた三人がそろった時に、あらためて計画について話すことになった。

北斗は、母さんと父さんが二人そろった日の夕食後に冒険の計画について切り出した。プリントアウトした計画書を見せ、今年のクリスマスプレゼントには何もいらないから、代わりに冒険の旅に出るA キヨカ がほしいとたのんだのだ。

しかし母さんは、計画書を見るなり険しい顔になった。①そして北斗が言い終えるなり、するどい目つきで父さんを見た。

「何かたくらんでると思ったら、そういうことだったのね。」

北斗と父さんはこっそり相談していたつもりでも、母さんはどこかで勘づいていたらしい。母さんの顔を立てるためにあらためてたのんだつもりが、こちらの 1 の内は読まれていたのだ。作戦は完全に失敗で、父さんは黙りこんでしまったし、母さんからは手B キビ しい返事がかえってきた。

「冒険冒険って夢みたいなこと言ってないで、現実的に考えてよ。」

北斗をひとにらみした後、母さんは計画書に 2 を走らせた。北斗はテスト用紙を採点されているような気分になった。

「たとえば——この『エアマット』っていうのは何なの?」

「野宿する時に敷くマットだよ。その上で寝袋に入って寝るんだ。」

「一人で野宿しながら大阪まで行くってこと?」

「……そのつもりだけど。」

「そういうところがあまいっていうの。子ども一人で道端で寝袋で寝てたりしたら、補導されたり誘拐されたりしかねないんだからね。牢屋に入れられたり悪い人につかまったりしてもいいわけ?」

母さんはだんだん早口になってまくしたてた。いつもだったら逆らわずに黙ってヒステリーをやりすごすところだったが、今日の北斗はなんとか反論を試みた。[*1]

「それだって、冒険かなって——。」

②「ばかなこと言ってんじゃないの。」母さんは北斗をさえぎった。「警察に補導されたらまず保護者や担任の先生が呼び出されるの。誘拐されたら親が脅迫されるの。子ども

だけでどうにかなることじゃないんだからね。」

「じゃあつかまらないように気をつければいいじゃん。」

「あんたが気をつけたからってどうなるもんでもないでしょう。何かあったら親をたよることになるんでしょ。結局はだれかに面倒をみてもらうなんて、そんなのは冒険でも何でもなくて、ただ子どもがあまえて勝手してるだけなの！」

強い口調で言い立てられるうち、北斗の視界がぼやけてきた。目がうるんでいるのだ。そのことがくやしくて、強く唇をかんだ。

頭ごなしにまくしたてられて泣いたりしたら、それこそあまえん坊の子どもだ。そりゃあ自分はまだ十二歳になったばかりで、まだまだ子どもかもしれない。だけど、ここで言われっぱなしでいたら子どものままだ。意地でも何か言い返さなくてはならなかった。

「そんなこと言ってたら――。」

なんとか声を出した。つまりかけてかすれた声が、自分の声じゃないみたいだった。

母さんがまた何か言おうとする。北斗は声を強めて言葉を続けた。

「そんなこと言ってたら、何もできないじゃないか！」

③最後はさけぶような言い方になった。母さんはびくりと身を引き、父さんも目を見開いている。

なんだか北斗が悪いことをしたような雰囲気だったが、ここで引き下がるわけにはいかなかった。

「僕は……何かしたいんだよ。あれはダメこれはダメって言われて何もしなかったら、何も変わらないじゃないか。」

少し落ち着いてしゃべったら、すると気持ちが言葉になった。返事してくれたのは父さんだった。

「北斗は――変わりたいんだな？」

これまで黙っていた父さんが口を開いたものだから、母さんもはっとなってそちらを見た。今度はさっきみたいなするどい目つきじゃなかった。

「うん。」北斗は強くうなずいた。「変わってみたい。」

「どうして――。」

母さんが言いかけた。④その腕に父さんがそっと手をそえた。

「北斗ももうすぐ中学生だ。男の子ってのは、そういう時期があるもんなんだよ。」

「すぐ男同士の話にして。」母さんがつぶやいた。「そうやって男の子だからって言われ

ちゃったら、私は何も言えなくなるじゃない。」
母さんがすねたような表情をうかべる。一瞬かっこよく見えた父さんだったが、そういう顔をされるとすぐに弱気になる。
「いや、そういうつもりで言ったんじゃないんだけど……。」
「どうせ私ぬきで、母さんをどうやって黙らせようかって相談してたんでしょ。」
「違うって。北斗と俺は、この話は母さんもいる時に相談しようって言ってたんだ。な？」
父さんがあわてて言った。北斗も真面目な顔でうなずいてみせた。
しかし母さんもそれで納得するほどあまくはない。口をへの字にして黙ってしまった。それを見た父さんは北斗に話しかけてきた。
「第一、北斗だってよくないぞ。たのみごとをする時は、そんな風に声を荒らげちゃダメだ。自分の都合でお願いしてるんだから、ちゃんとていねいな態度をとらなきゃ言うこと聞いてもらえないぞ。」
⑤「……。」
「世の中は思った通りにいくことばっかりじゃないんだし、何かしたい時には現実と折り合いをつけるのだって大切だ。」
「……折り合いって？」
「いくら計画書を作ったからって、百パーセント北斗の思いどおりにしたいってのはいたくってことだよ。これはあきらめるとか、ここはこう直すとか、そういうのを積み重ねて、それでもゆずれないことってのを認めてもらうんだ。」
「……結局、がまんしろってことか。」
北斗は口をとがらせた。父さんは味方をしてくれると思っていたのに、折り合いなどと言って北斗の計画を変えさせるつもりらしい。
「だってお前、考えてみろよ。」父さんは天井を指さした。「⑥お前の好きな、『はやぶさ』だってそうじゃないか。」
「『はやぶさ』って……宇宙の？」
「そう。鳥のハヤブサじゃないよ。ええと……。」父さんは母さんの方を見た。「惑星探査機だっけ？」
「小惑星探査機。」母さんが訂正した。「それから、工学実験探査機。」
それは地球から三億キロ離れた小惑星まで調査に行き、今は地球に帰ってこようとして飛んでいる探査機だった。宇宙の話が好きな北斗は小学生になる前からずっと「はや

ぶさ」にまつわる新聞記事やネット情報をスクラップ[*2]していたし、プラネタリウム[*3]に勤めている母さんは「はやぶさ」に何かあるたびに北斗に教えてくれる。

父さんは北斗と母さんを見比べるようにうなずいてみせた。

「その『はやぶさ』だって、最初の計画通りに飛んでるわけじゃないだろ?」父さんが言った。

「小型ロボットで小惑星を撮影するのをあきらめたり、地球に帰ってくるのを遅らせたり、何かあるたびに計画を変更してるじゃないか。」

「『ミネルバ』だよ。」北斗は超小型探査ロボットの名前を告げた。「それに、変更したわけじゃなくて、『ミネルバ』は『イトカワ』に着地できなかったんだ。」

そういう話になると、父さんより北斗の方がずっとくわしかった。小惑星の名前は「イトカワ」で、昭和の時代に日本の宇宙開発を進めたえらい博士からとった名前だ。「はやぶさ」の計画の中には手のひらにのるくらいの超小型ロボットで小惑星の表面を探査する予定もあって、実際に投下もしたのだけれど、方向がくるって宇宙のどこかに飛んでいってしまったのだ。それは単に［3］しただけで、計画を変更したわけじゃない。

「それだって、最初の計画通りにいかなかったのは一緒だろ。」父さんは強引に話を続けた。「それでも冒険してるってことに違いはない。だから北斗も、計画を練り直した方が冒険しやすくなるって言ってるんだ。」

「練り直したら、行ってもいいってこと?」北斗は声を上げた。「『はやぶさ』が『イトカワ』に行ったみたいに、僕も大阪まで――。」

「いや、喜ぶのはまだ早いって。」父さんは北斗をたしなめた。「たしか『はやぶさ』だって、計画を変えたから『イトカワ』が目的地になったんだろ? どこまでだったらいいのか、どうやったらいいのか、これから三人で考えようって言ってるんだよ。」

しゃべりながら、父さんは母さんにうなずきかけた。途中からは母さんに向かって話しかけているみたいだった。

（竹内真『自転車冒険記　12歳の助走』による）

注　＊1　ヒステリー＝感情的に激しく怒ったり大きな声を出したりすること。
　　＊2　スクラップ＝新聞などの記事を切りぬいて収集すること。
　　＊3　プラネタリウム＝天体や星座を映写機を使って見せる施設。

(1) ――線部①「そして北斗が言い終えるなり、するどい目つきで父さんを見た。」とありますが、この時の母さんの気持ちとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア　父さんが、自分を北斗の冒険の旅に勝手に巻きこもうとしていることを不満に思う気持ち。

イ　父さんが、北斗の立てた冒険の計画をそのまま認めようとしていることにあきれる気持ち。

ウ　父さんが、自分にはないしょで北斗と冒険の計画を進めていたことを腹立たしく思う気持ち。

エ　父さんが、冒険の旅を北斗へのプレゼントとして決めてしまったことにがっかりする気持ち。

(2) 1 ・ 2 はどちらも慣用句の一部です。それぞれに入る体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

(3) ――線部②「『ばかなこと言ってんじゃないの。』母さんは北斗をさえぎった。」とありますが、母さんは北斗の話のどのような点を「ばかなこと」と言っているのか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア　北斗が、父親に言われたとおりの計画を立てていけばよいと考えている点。

イ　北斗が、保護者や担任の先生に迷惑(めいわく)をかけてもかまわないと考えている点。

ウ　北斗が、野宿しながら大阪まで行くことに何の苦労もないと考えている点。

エ　北斗が、補導されたり誘拐されたりすることを冒険の一部と考えている点。

(4) ――線部③「最後はさけぶような言い方になった。」とありますが、このような言い方になったのはなぜですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア　母さんの強い口調にひるみそうな中、それに負けまいと声をふりしぼって自分の考えを伝えようとしたから。

イ　相手をおどすような強い言い方をあえてすることで、理屈(りくつ)では勝てそうもない母さんを黙らせようとしたから。

ウ　自分の考えを頭ごなしに否定されたことがくやしく、母さんの言うことも同じように否定してやろうとしたから。

エ　大きな声を出すことで、一人で大阪まで行ける強さを身につけていることを母さんにわかってもらおうとしたから。

(5) ――線部④「その腕に父さんがそっと手をそえた。」とありますが、この時の父さんの思いの説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 懸命（けんめい）に気持ちをうちあけようとする北斗の言葉を、落ちついて受け止めてほしいという思い。

イ 親に反論できるほど成長した北斗に向かって、はげますようなことを言ってほしいという思い。

ウ 黙ったままでいたことが二人の思わぬ対立をまねいたことを、母さんにあやまりたいという思い。

エ 気落ちしている北斗に対して、母さんがこれ以上問いつめようとするのをやめさせたいという思い。

(6) ――線部⑤「『……。』」とありますが、このような表現を用いることで、作者は北斗のどのような様子を表していると考えられますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 母さんに対して一方的に強い口調で話していたことを反省する様子。

イ 助けてくれると思っていた父さんから急にとがめられてとまどう様子。

ウ これまで母さんにどのような態度をとっていたかを思い出している様子。

エ 父さんが冒険の旅をあきらめさせようとしていることに腹を立てている様子。

(7) ――線部⑥「お前の好きな、『はやぶさ』だってそうじゃないか。」とありますが、父さんはなぜ「はやぶさ」の話題をここで持ち出したのだと考えられますか。適当なものを次の中から二つ選びなさい。

ア 最初の計画通りには飛行しなかった「はやぶさ」の話題を出すことで、北斗にも冒険の計画の見直しをうながそうとしたから。

イ 良い成果を得られなかった「はやぶさ」の話題を出すことで、北斗に冒険への過大な期待を持たせないようにしようとしたから。

ウ 母さんのくわしい「はやぶさ」の話題を出すことで、母さんをふくめた家族みんなで話をしていく雰囲気をつくろうとしたから。

エ 北斗の好む「はやぶさ」の話題を出すことで、腹を立てていた北斗のきげんを直し、母さんに対してあやまらせようとしたから。

オ 人々に勇気をあたえた「はやぶさ」の話題を出すことで、子どもが冒険を経験することの大切さを母さんにさとらせようとしたから。

(8) [ 3 ] に入る漢字二字の熟語として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 挑戦（ちょうせん）　イ 中断　ウ 失敗　エ 断念

(9) 文章中のA キヨカ ・B キビ を漢字に直しなさい。（ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと）

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

暗闇恐怖、高所恐怖、閉所恐怖、水恐怖、ヘビ恐怖など、私たちはさまざまな対象に恐怖を感じる。さらには、見知らぬ人に対する対人恐怖や、愛着をもった人との別れに対する分離恐怖など、人間関係に関する社会的な恐怖感情もいろいろ知られている。

恐怖とは、生物が生まれながらにもっている、危険に対処する心の仕組みである。恐怖を感じる状態になれば、心臓はドキドキして、手に汗にぎり、他の考えは頭から一掃され、恐怖の対象に意識を集中する。［A］、何らかの敵が暗闇からおそってくれば、生死をかけた判断を一瞬にしてくださねばならない。戦うか逃げるか、どちらにしても俊敏な行動が求められるので、心臓というポンプが手足に血液を送り、準備を整えるのである。

しかも、この準備は「過剰」になりやすい。本当に危険かどうかわからない段階でも、平静であってはいけない。危険が確実になるまで様子を見ていたら、準備が遅れて命にかかわるかもしれないからだ。時間がかかる論理的な思考も一時ストップせねばならない。つまり、ちょっとの危険でも敏感な「恐怖を感じやすい生物」が、生き残るのである。

今日まで生き残ってきた私たち人類も「恐怖を感じやすい生物」である。［B］、現代の生活環境では必要がなくなった恐怖感情も多い。危険なヘビがいない環境では、ヘビ恐怖はもはや役に立たない。さらに、*2弊害が生じた恐怖感情も多い。ある種の危険に敏感な人は、しばしばその恐怖がこうじて日々の生活に支障が出るほどになり、「恐怖症」と呼ばれる。高所恐怖症の人は都会の高層オフィスでは働けないし、閉所恐怖症の人は満員電車やエレベータに乗れない。①生き残るために鋭敏になった感情が、現代社会でかえってわざわいになるとは、皮肉なものである。

恐怖症であると、理性的には危険がないと知っていても、強い恐怖を感じてしまう。ヘビ恐怖症の人は、ゴムのおもちゃのヘビに対しても強い恐怖をいだく。「ゴムのおもちゃだ」とはっきり確信していても、である。筆者は小学生のころ、恐怖症とまでは言えないが、暗闇に恐怖を感じていた。夜、部屋の電灯を消したりつけたりすると、消した数秒だけに恐怖がこみあげてくるのを感じ、不思議に思って何度もスイッチをつけたり消したりしたものである。

恐怖症には、どのように対処したらよいのだろうか。ヘビ恐怖や暗闇恐怖については、怖い対象に近づかないようにすることができそうだ。現代の生活環境では、ヘビや

暗闇を排除することが可能であり、かりに恐怖症であっても日々の生活で恐怖を感じずにすむ。しかし、②対人恐怖などの社会的恐怖はそうはいかない。なんとか克服する方法を*3模索しないと生活に支障をきたす。そのためには、その感情の進化的な背景をさぐる進化心理学が重要となる。どのような進化的な必要性でその感情が生まれてきたかを理解すれば、おのずと対処法も明確になってくるものだ。

アフリカの草原に暮らすチーターは世界最速の動物として知られる。数秒で時速一〇〇キロメートル近くまで加速して、獲物になるガゼルなどを追跡する。長く走り続けることはできないので、茂みにかくれて獲物にじょじょに近づき、一気に追跡して十数秒で③かたをつける。獲物とされる*4ガゼルもけっこう足が速いが、チーターほどではない。だから、茂みに隠れた敵にいち早く気づき、すぐに逃げるのが生き残る道である。

ガゼルが人間のように「恐怖を感じる」のかどうかは別にして、危険察知能力はたいしたものである。追われるとつかまってしまう距離に何か不審な動きがあると、すぐに逃げ出す。何頭か群れになっているのは、その危険察知の仕事を群れで分担しているからである。近くのガゼルが危険を察知して逃げ出せば、どのガゼルもいっせいに逃げていく。それでも、チーターにつかまるガゼルがいる。総じて、危険察知能力が低かったり、足が遅かったりするガゼルがつかまってしまうのだ。

結果として、ガゼルの危険察知能力が、チーターの存在によって進化する。危険察知能力の低い個体は、チーターにつかまり、子孫を残せないので、より高い能力の個体が選択的に生き残る。こうした「自然淘汰」の過程で、現存するガゼルはみな、高い危険察知能力を遺伝的に保有している。

これを逆に、チーターの側から見ると、そこにも過酷な生存競争が見いだせる。もたもたしていたガゼルに追いついて引きたおしたチーターは、その首にかみついて窒息死させるのが*5常套手段だ。チーターの頭部は小さく、あごの力が弱いので、すぐにかみ殺すことはできない。肉を引きちぎるのにも時間がかかるので、獲物を殺した後は、他の捕食動物に見つからないように茂みにかくして食べる。

獲物を仕留めたことをハイエナに見つかりでもすれば、もう終わりである。チーターはハイエナと戦って勝てる力をもってはいない。戦いに勝利するのも、かみつき能力が決め手なのだ。高速走行能力に加えて、かみつき能力も高ければなおよいのだが、そのために頭部が大きくなると高速走行に支障があるのだ。

チーターの高速走行能力も進化の＊6賜物（たまもの）である。より速く走る能力をもったチーターがより多くの子どもを残し、その能力が高まったのだ。ガゼルなどの俊敏な獲物がたくさん生息するアフリカの草原環境でチーターは、高速走行能力のほうを選択したのである。

このように、④環境が特定の生物に対して、特定の形態や機能を強く要求する状況（じょうきょう）になっていることを「淘汰圧が高い」と言う。草原の環境では、足の速いチーターを選択的に生き残らせて、足の遅いチーターを淘汰する圧力が働いていると考えるのである。ガゼルの視点から考えれば、この状況は同時に、⑤チーターの存在がガゼルの危険察知能力を高める淘汰圧になっている。

さて、あくまで仮定の話だが、アフリカの草原でチーターなどの捕食動物が絶滅（ぜつめつ）してしまったら、ガゼルはどうなるであろうか。食べられてしまう危険がなくなって生息数が増えるだろう。危険察知能力を高める淘汰圧は失われ、以前ほど俊敏でなくても生き残れるようになる。すると、危険察知能力は多様化する。祖先の遺伝子を引きついで危険察知能力が高い個体もいれば、遺伝情報のコピーミスでその能力が低くなった個体もいるという、多様な状態になる。

同様に、私たち人間の危険察知能力も、環境の危険性が低下したのにともなって淘汰圧が低下し、多様化したのだ。ヘビ恐怖は、かつて近くに毒ヘビがいた生活環境では有利であったが、今では意義が失われた。その結果、ヘビをひどく怖がる人からまったくへっちゃらの人まで、多様な個性をもつ人々が生きる世の中になったのだ。

（石川幹人（まさと）『人はなぜだまされるのか』による）

注　＊1　一掃され＝すべて取り除かれて。
＊2　弊害＝害となる悪いこと。害。
＊3　模索しないと＝あれこれ試みながら探し求めないと。
＊4　ガゼル＝シカに似た体型をした動物。
＊5　常套手段＝いつも決まって使う手段。
＊6　賜物＝結果として生じたよい物事。

(1) A ・ B に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア A＝つまり　B＝さらに　イ A＝やはり　B＝また
ウ A＝たとえば　B＝しかし　エ A＝しかも　B＝そして

(2) ――線部①「生き残るために鋭敏になった感情が、現代社会でかえってわざわいになる」とありますが、これはどういうことを言っていますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 人間が生きていくために必要だったはずの恐怖感情が、現代社会では恐怖症を生み出しているということ。
イ 恐怖を感じやすい生物である人間が、現代社会では恐怖を感じることができにくくなっているということ。
ウ 現代社会では必要がなくなった恐怖感情に対してまでも、人間はその対処法を探そうとしているということ。
エ 現代社会ではある種の恐怖がなくなったことで、別の種類の恐怖が新たに生まれるようになっているということ。

(3) ――線部②「対人恐怖などの社会的恐怖はそうはいかない」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア ヘビ恐怖や暗闇恐怖と異なり、社会的な恐怖は理性的なものなので、人間にとってそれは捨てるべきものではないから。
イ 現代社会の生活環境の中では、いくつかの恐怖感情は取り除けても、人と人との関わりを取り除くことは難しいから。
ウ ヘビ恐怖や暗闇恐怖と異なり、社会的な恐怖は生き残るために必要なものなので、その恐怖症を治すことは難しいから。
エ 現代社会の生活環境の中では、人間どうしの関係が大切で、それをこわしてしまうような恐怖感情はもつべきではないから。

(4) ――線部③「かたをつける」とありますが、ここではどのようなことを示していますか。その具体的な内容をふくむ一文の**初めの五字**（句読点がある場合はそれも字数にふくむ）を答えなさい。

(5) ――線部④「環境が特定の生物に対して、特定の形態や機能を強く要求する状況になっている」とありますが、その結果どのようなことが起こると考えられますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア ある生物が、生き残るために、危険察知の能力を多様化させていく。
イ ある生物が、生き残るために、あるきわだった能力を発達させていく。
ウ ある生物が、生きていく環境に合わせ、ある遺伝情報を細分化させていく。
エ ある生物が、生きていく環境に合わせ、危険察知の能力を向上させていく。

(6) ――線部⑤「チーターの存在がガゼルの危険察知能力を高める淘汰圧になっている」とありますが、これはどういうことを言っていますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア ガゼルの危険察知能力の多様化が、あまり足の速くないチーターも生き残らせるということ。
イ チーターの多様な能力を高めたアフリカの草原が、ガゼルの危険察知能力を高めるということ。
ウ ガゼルが危険察知能力を高めることが、生き残ったチーターの走行能力をより高めるということ。
エ 足の速いチーターが生き残ることが、より危険察知能力の高いガゼルを生き残らせるということ。

(7) この文章で述べている内容と合っているものを、次の中から選びなさい。

ア ガゼルは群れをつくることによって、個体としての危険察知能力も高めることができる。
イ ハイエナは生存競争に勝つために、危険察知能力と共に高いかみつき能力を身につけた。
ウ 近くに危険なヘビがいたかつての生活環境では、多くの人間が強いヘビ恐怖をもっていた。
エ 現代の恐怖症の一例として、筆者は小学生のころに感じた暗闇に対する恐怖を挙げている。

国　語　解答用紙（平成二十四年度）

【二】

(2) (1)

②

③

【三】

(9) (7) (5) (3) (1)

A

B

(8)

(6) (4) (2)

1

2

【三】

(5) (4) (1)

(6) (2)

(7) (3)

| 受験番号 | |
|---|---|

（国語）

※記入しないこと